痛快スーパーナンセンスムービー
第2弾 いざ登場！

隠しても隠しても、
こぼれる知性はブリティッシュ、
大天才5人組の笑殺傑作パロディー。

MONTY PYTHON'S
モンティパイソン アンド ナウ
日本語版

AND NOW FOR SOMETHING COMPLETELY DIFFERENT

1月19日(土)〜2月10日(日)
入場料＝1,300円(学生1,100円／中学生以下900円)
特別鑑賞券＝1,000円
(パルコ渋谷・池袋各店1F
都内各プレイガイド／大学生協にて発売中)
上映時間＝午前11時40分
午後3時20分／午後7時
■同時上映 モンティパイソン・アンド・ホーリーグレイル
配給＝テレキャスジャパン

PARCO 西武劇場

キャスト・スタッフ

監督……イアン・マコウトン
制作……パトリシア・キャシー
パイソン・プロダクション
脚本・出演……グラハム・チャップマン
ジョン・クリース
テリー・ギリアム
エリック・アイドル
テリー・ジョーンズ
マイケル・ペリン

声
ジョン・クリース……納谷悟郎
グラハム・チャップマン……山田康雄
エリック・アイドル……広川太一郎
マイケル・ペリン……青野　武
テリー・ジョーンズ……飯塚昭三
演出……伊達　渉(東北新社)
翻訳……岩佐幸子

ギャグ又ギャグの爆笑連打!

ブラックメイル／結婚相談所／レストランにて／楽しい楽しい英会話のお勉強／もしバナナに攻撃されたら?／英陸軍の進軍体操／キラー・カー／英独大戦争／牛乳配達員の悲劇／007おばさんギャング／ブライアン　ノリス夫妻の大冒険／鼻にテープレコーダーを仕込んだ男／キリマンジェロ登山隊／上流階級アホウレース

つい先達て公開された『モンティ・パイソン＆ホーリーグレイル』は好評のうちに幕を閉じ、この程、続く劇場用第二作が入荷された。それが今回の『アンド・ナウ・フォー・サムシング・コンプリートリィ・ディファレント』である。〝今度は全く趣向を変えて〟ぐらいの意味だろうか。もっと砕いて言えば、一味違うということになろう。では、どのように一味違うのであろうか。

例のTV版『モンティ・パイソン』が放映されていたのは、イギリスのBBC。日本で言えばNHKのような、いわばおカタい放送局である。そんな放送局であのスーパー・ナンセンス・ギャグが罷り通ったのだから、これはもう一味も二味も違う筈である。つまり、あのような番組が制作されたこと自体、すでに大変な驚きだ。

ジョン・クリース、グラハム・チャップマン以下、このシリーズではお馴染みのキャラクターたちの演じるギャグは、一見思いつきで作られているように見えるが、実はそうではない。彼らの発想の根底にある毒は、当然の如く、何かに向かって周到に仕向けられている。それは、時には現代の狂気であったり、政治のバカバカしさであったり、人間の愚かしさであったりする。そして、その毒の鋒先は、大概の場合、全ての権威主義的な物に向けられている。

制作者たちは、日常の中から、この権威の臭いをすぐに嗅ぎとり、ギャグという形に昇華させる。だから、観ている者は笑っているうちに、何だかそら恐ろしい気分になるのである。ただそら恐ろしい気分にさせるのは、むしろ簡単かもしれない。シリアスな場面をこれでもか、これでもかと見せつければそれでいい。しかし、笑い飛ばした後に、シリアスな物を観客に感じさせることができれば、これはそれ以上に難かしい。『モンティ・パイソン』のしたたかさは、まさにここにあるのだ。お馴染みのキャラクターのうち、何人かが、オックスフォード大学出身と聞くが、成程と思ってしまう。単なる思いつきやその場かぎりのものではなく、透徹した視点がそこには感じられるからである。

こう考えてみると、政治、因襲、社会、風土といったものを裁断するには、何も剛直な刀でなければならぬ、ということはない。もっとしなやかで、もっと鋭い切り口を持った、例えば剃刀のようなものでもよい。いや、むしろ、そういう切り味を持った武器でなければ、この気狂いじみた現代の状況を戦い抜くことはできないだろう。

『アンド・ナウ・フォー・サムシング・コンプリートリィ・ディファレント』は、まさに現代を切り裂く剃刀である。切った時には傷まないが、やがて疼くような傷みをもって、打撃を与えるのだ。

元来、ブラック・ユーモアやパロディが武器としての市民権を得る時には、その底に政治的な部分を持ち合わせていなければならない。つまり、世間一般で言う政治的な、という意味ではなく、例えば、路上に捨てられている犬の排泄物に腹を立てること即ち政治的、という意味でである。

怒りは、それ自体すでに政治的なものを含んでいるからだ。

そして、その怒りをバカ正直に訴えるのではなく、いかに屈折した形で表出して行くかに、表現の生命がある。実は、ここのところにこそ、このモンティ・パイソンの魅力があるのではなかろうか。

一時、カナダでテレビ版シリーズの放映が中断されると、ファンが押し寄せて、再放映を迫ったと聞く。一度、あの毒にあてられると、もうなしでは済まないという気持ちも、判らないではない。まるで麻薬の禁断症状かのようだ。

そして今回、モンティ・パイソンの麻薬性患者のために(?)パイソンピクチャーズが、同じスタッフキャストでこの「アンド・ナウ・フォー・サムシング～」を劇場用として制作したという訳だ。

よく、モンティ・パイソンの笑いは、日本人には向かないという話を耳にするが、そうではない。元々、日常的に政治性を持たない日本人には、その笑いを共有（実は、怒りを）することに馴れていないのである。どんなに、楽しいことでも、悲しいことでも、同じような経験がなければ、実感することができないように。

人間とはいかにバカバカしい生き物であるか、笑っているうちに、何だか哀しくなってきてしまった。

岡山　徹